



2018年2月10日（土） 13：00～17：00
国連大学 ウ・タント国際会議場

知って応援。伝えて応援。 アップデートふくしま

福島の実況に就いて、全国・海外の人々の認識や思い込み、
あるいはWeb等、さまざまな誤解や誤情報が存在・流通している状況をふまえ、
今後の改善に向けた情報発信・拡散・普及活動に生かし得るものとして、
それらをアップデートするための事実、あるいは視点や手法などを明らかにし、
共有することを目的として今回のパネルディスカッションを開催します。

主催： アップデートふくしま実行委員会 *実行委員/早野龍五 越智小枝 ウィリアム・マクマイケル 開沼 博
共催： 環境省、国連大学
後援： 内閣府、復興庁、外務省、福島県、福島県教育委員会、
ONEふくしま（福島民報社、福島民友新聞社、福島テレビ、福島中央テレビ、
福島放送、テレビユー福島、ラジオ福島、ふくしまFM）
協力： 福島県立福島高等学校、福島県立ふたば未来学園高等学校、福島大学、
Discovery Networks Asia-Pacific、TOKYO FM

Today's timetable

13:00～ 開会挨拶
13:05～ 第1章 福島は今を考える～理論編～
14:25～ 休憩
14:40～ 第2章 福島がどのように伝わっているか～事例編～
15:50～ 休憩
16:10～ 第3章 知って応援。伝えて応援。～総括編～
17:00 閉会

司会： 高橋 万里恵（フリーアナウンサー）

TOKYO FMをはじめJFN38局で月曜日から金曜日6:00-8:55（一部放送局を除く）に
放送されている情報ワイド番組「クロノス」のパーソナリティを務めるなど多方面で活躍。

アップデートふくしま 実行委員



早野 龍五

東京大学名誉教授

東京電力福島第一原子力発電所の事故後、情報が錯綜する中で事実を分析し発信し続けた物理学者。以来、学校給食の陰膳（かげぜん）調査や子どもたちの内部被ばく測定装置開発など、誠実な計測と分析を重ね、国内外に発表。



越智 小枝

東京慈恵会医科大学 臨床検査医学講座 講師

東京医科歯科大学医学部卒業後、公衆衛生に興味を持つ。インペリアルカレッジ・ロンドン公衆衛生大学院への留学決定直後、東京で東日本大震災を経験。相馬市の仮設健診などの活動を手伝いつつ世界保健機関（WHO）やパブリックヘルス・イングランドで研修を積んだ後、2013年から2017年まで相馬中央病院勤務。



ウィリアム・マクマイケル

福島大学 経済経営学類 国際地域経済専攻 助教

カナダのバンクーバー出身。東日本大震災前から福島に住み、自他ともに認める「カナダ人の福島ファン」として、福島の情報を海外に向けて積極的に発信するとともに、復興教育と関連付けたグローバル人材育成プログラムの設計や、被災地域を対象としたスタディ・ツアーを行なうなど、海外における福島の理解の復興に取り組んでいる。



開沼 博

立命館大学 衣笠総合研究機構 准教授

いわき市生まれ。10年以上にわたり福島と原発についての社会学的研究を進め、3.11後はフィールドワークとデータ分析をもとに福島の復興の現状と可能性を調査。『はじめての福島学』『福島第一原発廃炉図鑑』などの著書を刊行するとともにテレビ・ラジオ・新聞・雑誌等で一般向けの情報発信を続けている。

共催者代表



竹本 和彦

国連大学サステイナビリティ高等研究所 所長

1974年環境庁入庁。地球環境問題に関する国家戦略など持続可能な社会実現に向けた政策立案に取り組んだ。2001年環境省設立後、環境管理局長や地球環境審議官などを歴任。2014年より現職。国連大学においては「持続可能な開発目標」（SDGs）達成に向けた活動に取り組んでいる。



森本 英香

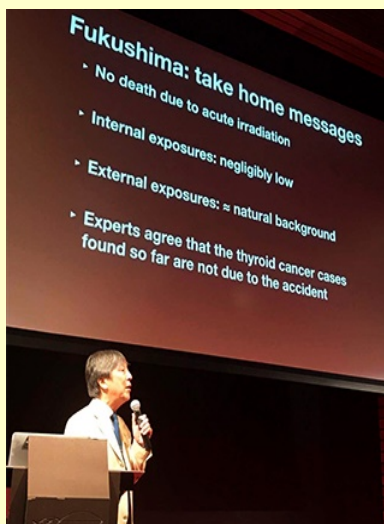
環境省 環境事務次官

1981年環境庁入庁。環境基本法の制定、N G Oの活動を支援する地球環境基金の創設や環境省設立に携わる。震災発生後は原子力規制委員会の設立に尽力し、2012年原子力規制庁次長。その後、環境省で除染、中間貯蔵施設の整備等に関わっている。

アップデートふくしま実行委員による問題提起と 会場の皆さんとの意見交換。

早野 龍五さん

2011年3月に発生した東日本大震災から時間が経ち、被災地では復興・創生に向けて、環境回復の活動が進んでいる一方で、福島に関する正しい情報が、国内はもとより海外にも十分に伝わっておらず、風評払拭が課題になっています。



いまの時点で明らかなのは、さまざまな調査や測定の結果、起きてしまった事故に対して、実際に人々がこうむった被ばく量はとても低かったということです。特に、内部被ばくに関しては、実際に測定した数値をみると、当初想定していたよりも、かなり軽いことがわかっています。「もう食べ物については心配しなくていいよ」と言えるレベルです。きちんと測った結果として証明できます。

ただ、「内部被ばくが軽かったということ」は、心から良かったと思っていますが、「起こってしまった事故」は全くOKではありません。未曾有の災害であろうが、そもそも絶対に起こしてはいけないことだと思っていますし、大本の問題含めて、全く解決しているわけではありません。

震災から今までは、マイナスをゼロに戻すような作業の連続でした。これからは、できるだけ、未来に向かってゼロからプラスになるようなことをしていきたい。特に、今後社会に出ていく若い人たちに投資するような活動をするこ
とで、将来大きな力になるような、道を示してあげたいな
と思っています。

越智 小枝さん

福島県で原発事故の後に見られた健康被害のほとんどは、放射能による健康被害ではありません。しかし放射線やがんの話ばかりが語られることにより、現在進行形の多くの健康被害が見すごされています。それだけでなく、福島で起きた問題が放射能という特殊な事態であり、他人事である、と考えることにより、県内外に大きなギャップが生まれています。



世界では毎年300以上の自然災害が起き、数億人という方が被災者となっていることを考えれば、災害は決して特殊な事態ではありません。また、福島で見られた様々な問題、たとえば避難生活や避難行動による健康被害や差別・偏見の問題などは、日本国内だけでなく世界中の被災地にも共通する問題です。

そのような問題を解決する過程でこの7年の間に福島が学んできたことは、災害大国日本に暮らす全ての人にとって大切な知恵だと思います。今福島県内外のギャップを埋めるためには、そんな福島のことを知らないと思えるという認識に立って、皆さんが自分事として福島を考えることが鍵だと思います。

相馬中央病院を中心に福島県内での現場経験や福島県民の方と直接接してきた状況などを踏まえ、「知らないと思える福島」について、皆さんとお話しできればと思っています。

ウィリアム・マクマイケルさん

海外から「福島」がどう見られているか、どう誤解されているか。

世界中の人が「福島」への偏見を抱いているとした場合、海外や国内で出会う外国人から、福島についてどのようなことをよく聞かれるのか、または福島を分かってもらうためにこれだけは説明しようという事柄はどんなものなのかを考え、共有することが重要なのではないのでしょうか。あるいは、海外の人たちが、福島から学びたいことは何なのかを知ることでもあるのではないのでしょうか。

「自分事」という点に関連し、逆に(福島のような)社会的な問題に直面している海外(国や国内の地域)を、自分たちはどう見ているのかと考えてみる等、日本人の海外への偏見事例も研究し、対比させてみるということも有意義だと考えています。

今回、福島大学で震災後グローバル教育を担当してきた経験をもとに、福島に学びに来る海外の学生の生の声をお届けするとともに、福島在住の一外国籍住民として、今後の世界に向けての情報発信の在り方を皆さまと一緒に考えたいと思います。



ファシリテーター：開沼 博さん

事故から間もなく7年。

福島は動いている(動いてきた)し、多くの課題が現場の方々の尽力の中で解決し、そうでなくてもゴールは近いと認識しています。漁業や林業、避難の継続に伴う健康リスクなど課題はまだありますが、地域では、若い起業家や斬新な発想で経営をする事業者も生まれてきています。

こうした「福島」をどう伝えていくか。

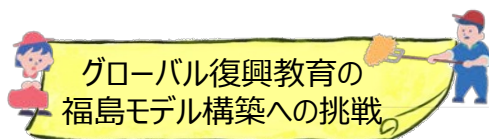
伝えていく工夫をこれまでもしてきましたし、これからもしていかなければなりません。誤った福島像がなぜ構築されたのかという社会的視点、それをどのように変えていくのかという工学的視点の両方が必要です。本日は双方を視界に入れて、今後どこに進むのかというマニフェストを示す場になればと思っています。

東京に居ながら、福島に関心を持ち、漠然と福島を応援したい、でも何を知り・何を伝え・何をすればいいのかと戸惑う層に対し、「きっかけ(取っ掛かり)」を提示していく。イメージを復興していくために何が必要なのか。議論すべきポイントは多くあると思います。

「アップデートふくしま」に参加することで、福島を知って、伝えて、アップデートする。その動きがはじまる場にしたいと思っています。



教育、メディアから見た福島の今。 どのように伝わっているか、また今後どう伝えていきたいか。



福島大学 経済経営学類 国際地域経済専攻 助教 ウィリアム・マクマイケルさん

**福島アンバサダープログラムに参加した積極的な学生たちは、
福島の現実を世界に伝える大きな役割を果たしてくれるはずです！**

福島大学では、これまで海外8カ国の協定大学から150名以上の短期留学生を招き、約2週間のプログラム「Fukushima Ambassadors Program」を実施しています。

このプログラムでは、被災地においてボランティア活動や、有識者との意見懇談会、被災地視察、ホームステイなどを体験します。

実際に参加した学生たちの中には、プログラムの過程で、「福島から何を学べるのか」という姿勢を打ち出す者もいました。こうした取り組みの重要性を多くの方に知ってもらいたいと思っています。



福島アンバサダープログラム 検索



Channel Japan/CNBC ASIA
「FUKUSHIMA TODAY」

「FUKUSHIMA TODAY」は、東南アジア全域における日本関心層に向け、福島の環境の再生した様を広く紹介するドキュメンタリースタイルの15分番組をCNBC ASIAの“Channel Japan”の中のコーナーとして放送しています。

番組の主演として、環境回復・復興が進む福島の今を伝えるさまざまな分野のキーパーソンを設定。それぞれキーパーソンにふさわしいテーマにもとづく福島の現況や魅力を取り上げています。

#1 『外国人学生が見た福島』

この番組では、マクマイケルさんを追いかけてながらスタディ・ツアーに密着取材。来日した学生が何を見て、何を感じ、どのように変化するかを探っています。



ディスカバリー・チャンネル クリエイティブチーフ ビクラム・チャンナさん

「福島の今」を信頼性のある情報として伝えたい！

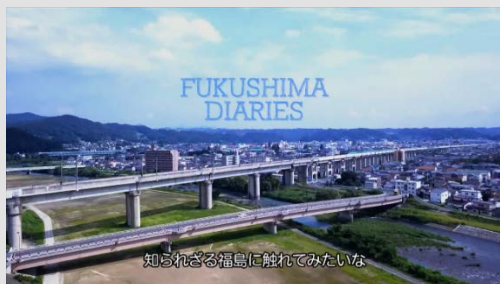
「FUKUSHIMA DIARIES」は、まさにそういう番組になったと思います。

ソーシャルメディアの時代。フェイクニュースと呼ばれる情報が氾濫し、メディアの信頼性が失われてきていると感じています。

私たちディスカバリーチャンネルで福島をどう伝えるか、そして情報の信頼性を高めるにはどうすれば良いかを考えた時、幅広いネットワークを持つソーシャルメディアのインフルエンサーを起用することがベストな方法だと考えました。

事実を伝える彼らの真摯な語り口は、ディスカバリーのハリウッド的とも言えるジャーナリズムと結びついて、記憶に残るストーリーとして皆さんに伝わるのではないのでしょうか。

ディスカバリーアジアの制作部門のヘッドとして映像制作を指揮。これまでに500以上のドキュメンタリーを制作、アジアアテレビジョンアワーズ、ニューヨークフェスティバル、アカデミー賞などでの数々の受賞作品を生み出した。アジア各国の若手映像制作者の育成にも力を入れている。日本関連の番組も多数制作。



Discovery Channel 「FUKUSHIMA DIARIES」

「FUKUSHIMA DIARIES」は、東南アジア全域における日本関心層に向け、福島的环境回復を広く紹介するドキュメンタリースタイルの30分番組として、視聴者数世界NO.1のドキュメンタリーチャンネル「ディスカバリーチャンネル」が環境省の協力を得て企画し、取材・制作されたものです。

3人の若者が、福島を訪れ、彼らの興味のおもむくままに県内のあちこちに出向き、様々な地元で暮らす人や、未来に向けた学校作り、先進技術の開発や東京電力福島第一原子力発電所、中間貯蔵施設などの「今」を目撃し、人々から話を聞き、体験を深めます。

3人とは、環境系の科学者のマイケル・シェレンバーガー、ユーチューバーのアンジェラ・アン、フォトグラファーでインスタグラマーの、ジョー・アラム。彼らは多くの人々に影響力をもつオンライン・インフルエンサーで、その使命は福島「今」の様子を真正面からとらえ、紹介することにあります。

ディスカバリーチャンネルは、この番組制作に彼らを起用するにあたり、3人の専門性や興味をふまえながら取材テーマを設定し、それぞれの視点で福島を見てもらうことにしました。

環境NGOを創設・運営し、環境問題に深く関わっているマイケルのテーマは「福島除染」。ユーチューブのチャンネルを立ち上げ、海外ではあまり知られていない日本の紹介に取り組んでいるアンジェラは、「福島美しさ」。そして写真やデザインについての造詣が深く、旅好きでもあるというジョーは「福島未来」。

3人は福島を巡り、生の体験を得、時に応じて合流し、話を交わします。

そんな彼らが足を運び、見て、体験した福島「今」を通じて、環境回復によって活力を取り戻しつつある福島を、自然や季節の美しさや文化、風土などを紹介する映像を織り交ぜながら紹介しています。

番組「Fukushima Today」「FUKUSHIMA DIARIES」は、除染情報サイトからご視聴いただけます。

http://josen.env.go.jp/movie_event/

除染情報サイト

検索



テレビユー福島 TUF 編成局チーフプロデューサー 伊藤 明さん

**福島に対する誤った認識を、
我々は映像でアップデートしていきたい！**

海外では、原発事故が起こったあの時、あの印象が未だに残っていて、我々が思っている以上に現在の福島の姿が正確に伝わっていません。

テレビユー福島では、震災や原発事故からの復興と風評払拭を目的に海外向けドキュメンタリー番組「FUKUSHIMA TODAY」*を制作し、中国や韓国そして東南アジアの合計18か国で放送されました。

このような番組を通じて、今の福島のありのままの姿が少しでも伝わればと思っています。

*ドキュメンタリー番組「FUKUSHIMA TODAY」について詳しくは5ページをご覧ください。

東京都出身。1983年、開局第一期生としてテレビユー福島に入社。報道、番組制作、編成に従事。震災時は報道制作局長として震災・原発報道の指揮にあたる。ここ数年は、海外向け番組のプロデュース業務を担当。

オルタナティブスペース「UDOK.」主宰 小松 理虔さん

**小名浜をもっと面白く、もっと楽しく、もっと刺激的に。
自分たち自身で自立して、情報発信して、
魅力に気づいていくことが何よりの復興。**

2013年から福島第一原発沖の海洋調査を行う「いわき海洋調べ隊うみラボ」を結成し、定期的に一般客を募って原発沖で魚を釣り、その放射線量を測定し、情報発信するという取り組みを続けています。福島沖で続けられている試験操業では、国の基準値を超える魚は見つかっていません。そのような事実を伝えていくことが、福島の復興につながると考えています。



1979年いわき市小名浜生まれ。法政大学文学部卒。福島テレビ報道部記者を経て、上海へ移住。上海では、日本語教師、日本語情報誌のディレクターとして活動。2009年に帰国後、小名浜をテーマに広くライフスタイルを伝える「tetoteonahama」、オルタナティブスペース「UDOK.」を立ち上げる。



ワンダーファーム 代表 元木 寛さん

**農業を通じて福島の復興に寄与したい。
農業を通じて過疎地域を活性化させたい。**

ワンダーファームでは、被災地福島の復興を果たしたい、農業の幅広い可能性に将来性を感じている仲間達と、福島から世界へ続く復興モデル・農業の成長産業化モデルを作り上げたいと思っています。

1997年に福島工業高等専門学校を卒業し、JR東日本に入社。2003年に地元福島に帰郷し農業生産法人とまとランドいわき設立。2013年(株)ワンダーファーム設立。日々の取り組みが認められ農林水産分野での「天皇杯」を受賞。2014年 J R 東日本との合併会社(株) J Rとまとランドいわきファーム設立。トマト生産のトップランナー。

東京大学名誉教授 早野 龍五さん

科学的なリテラシーというのは、教わって得られるものではなく、自分で鍛えて身につけていくものだと思います。

昨年10月にバークレー国立研究所の村上治子博士の協力で実現したトークイベント“The Future of Fukushima: A New Generation Rises to the Challenge”（米カリフォルニア大学バークレー校で実施）では、福島高校生徒2名、ふたば未来学園高校1名の生徒とともに福島の現状についてトークセッションを行い、震災体験からの学びや福島の未来に向けたメッセージを伝えました。

当日会場には122名のバークレー校の学生達と大学関係者などが参集し、多くの海外メディアにも取り上げられました。

このイベントの成功は、メインである高校生たちの語る力にあり、それがメディアにも伝わったと考えています。



福島県立福島高等学校2年 沖野 峻也さん

自分たちで外部被ばく線量に関するデータを解析しています。今の福島における放射線量は低下していて、健康影響も心配ありません。

体育の授業が終わり、着替えている時に地震がおきました。父は福島県庁職員、母は以前、放射線に携わる仕事をしていたこともあり、家族で相談して避難せず福島に残りましたが、テレビで原発の建屋が爆発した映像を見て、両親が「これはダメだ」と呟いたことが記憶に残っています。

高校では日仏交流に参加し、昨年春にはフランス・パリで第一原発の廃炉について発表してきました。



福島県立福島高等学校2年 荒 帆乃夏さん

福島には美味しい食べ物が沢山あります。福島＝魅力的なところ、美しいところというイメージを持ってもらえるように国内外に発信していきたいと思っています。

震災時は小学4年生でした。体育館で卒業式の練習をしていて、雪の降る校庭に避難し、とても不安な気持ちになったのを覚えています。原発事故のことは、テレビのニュースで見っていました。

高校では日仏交流に参加していて、昨年春にはフランス・パリに行き、福島の食べ物について情報を発信してきました。

ふたば未来学園高等学校2年 遠藤 瞭さん

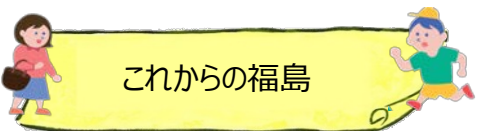
将来は福島第一原子力発電所の廃炉作業に関わり、故郷の復興に役立ちたいと思っています。

震災当日、大熊町の小学校で学活をしていました。翌12日朝、町内放送で避難指示を聞き、母の車でいわき市へ避難しました。父が原発で働いていたこともあり、会えない時間が長く続いたのですが、仕事の合間をぬって避難していた東京の親戚の家に会いにきてくれたことをよく覚えています。

原発近隣町村の小中学校では、復興について考える授業があります。私の場合は小中、そして高校でも復興について考えるということに取り組んでいます。



第1章、2章のプレゼンテーションの総括と これからの福島をどう伝えていくか、意見交換。



福島県立福島高等学校 教諭 原 尚志さん

**福島の状態を科学的に語り、
国内外に福島の魅力を熱く発信できる生徒を育てたい！**

福島県立福島高等学校は、2007年度よりSSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校となり、現在3期目の指定（2021年度まで）となっています。SSHとは、文部科学省が指定する、理数系教育の充実を図る取り組みで、未来を担う科学技術系人材を育てることをねらいとしています。本校では、SSHの趣旨に則して科学技術、理科・数学教育を重点的に行うとともに、大学や研究機関とも連携して、「グローバル人材育成」「ICT活用」「地域創生を担う人材育成」を目指す魅力的なカリキュラムを開発していきます。

いわき市生まれ。1985年より福島県立高等学校教諭（理科）。福島工業高校、磐城高校、福島高校、二本松工業高校を経て、2度目の勤務となる福島高校で東日本大地震を経験。以後、部活動で放射線計測に取り組む生徒の指導にあたる一方、2015年から毎年夏、福島県内外海外の高校生が福島の現状を学んで発信する「Radiation Protection Work Shop」の実施に取り組んでいる。



写真提供：和田剛

福島県立ふたば未来学園高校 副校長 南郷 市兵さん

目の前の課題と向き合い、未来の変革者を育てたい！

原子力災害からどういうステップを踏んでいけば復興するのか、大人も絶対の解を持っていません。そのような状況でも、将来世代はチャレンジしていくことが求められるのです。

世界中の人々と協働しながら一步を踏み出し、未来を切り拓いていく力が必要になりました。福島はローカルでありながら、グローバルな力が必要な地域になったのだと思います。

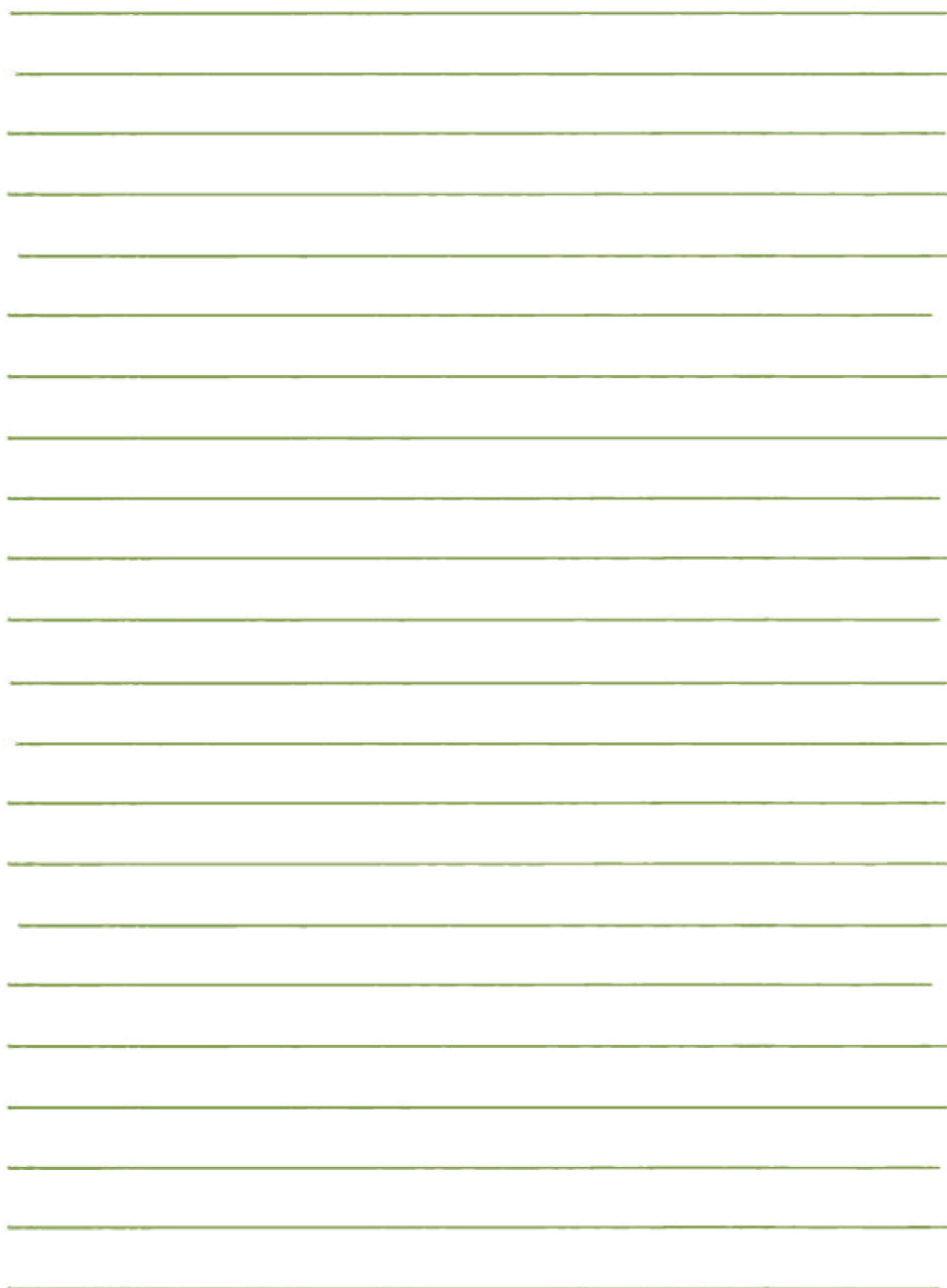
私は、生徒たちが福島の課題解決だけに取り組む子になって欲しくないともっています。この地域で彼らが課題解決していくアクションの中には、もしかしたら世界の他の課題を解決するヒントが隠れているかもしれないのです。そういう力を伸ばすようなカリキュラムを持った学校を作ろうと思っています。

1978年生まれ。慶應義塾大学卒業後、大手IT企業でシステム構築に携わった後に文部科学省入省。東日本大震災後は、被災地と同省をつなぐパイプ役として各地の教育現場を駆け回る。震災を契機とした新たな教育の創造を目指した「創造的復興教育」を推進し、東北の中高生らと国内外で様々なプロジェクトを実施。その一環として、福島県立ふたば未来学園高等学校（広野町）を設立。福島県に向向し、同校の副校長に就任。同時に、中央教育審議会教育課程部会専門委員を務め全国の教育改革の方向性の議論にも加わる。著書に、『希望の教育』（筆頭著者、文部科学省創造的復興教育研究会 著、2014年3月、東洋館出版社）等がある。



memo

A series of horizontal green lines for writing, spanning the width of the page.





A series of horizontal green lines for writing, spanning the width of the page.





参加者
募集!



震災からまもなく7年が経過する福島。
様々な地域、様々な分野で一歩ずつ日常を取り戻す取組みがなされています。
こうした取組みについて、その土地を訪れて知り、これから進んでいく「みち」を一緒に考えてきました。
今回は、これまでの「ふくしま「みち」さがし」での気づきを多くの方と共有し、
未来のふくしまについて、みんなで考えていきます。

*「みち」とは、これまで知らなかったことの「未知」と、これからの福島「道」の意味。くるまざカフェは、くる、まざる等の意味が込められています。

参加
無料

日時:2018年2月24日(土)12:45-16:30(開場 12:00)

会場:コラッセふくしま 4F 多目的ホール(福島県福島市三河南町1番20号)

プログラム

第一部

ふくしま“みち”さがしトークセッション
現地を巡り感じた気づきを共有します。

- ①ふくしまの果樹・森・里・海の今を知る
- ②日本で最も美しい村「飯館」を訪ねる
- ③除染後、仮置場、中間貯蔵の今を知る

第二部

ワークショップ

5つのテーマに分かれふくしまのこれからを考えます。

- ①浜通りの“くらし”と“しごと”
- ②あぶくまの森林里山の“くらし”
- ③ふくしまの伝え方、伝わり方
- ④シニア世代のチャレンジ
- ⑤除染のその後～仮置場、中間貯蔵～

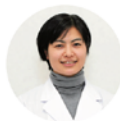
ファシリテーター



開沼 博

立命館大学
衣笠総合研究機構 准教授

福島県いわき市生まれ。10年以上にわたり福島と原発についての社会学的研究を進め、3.11後はフィールドワークとデータ分析をもとに福島の復興の現状と可能性を調査。『はじめての福島学』『福島第一原発廃炉計画』などの著書を刊行するとともにテレビ・ラジオ・新聞・雑誌等で一般向けの情報発信を続けている。



越智 小枝

東京慈恵会医科大学
臨床検査医学講座 講師

東京医科歯科大学医学部卒業後、公衆衛生に興味を持つ。インベリアルカレッジ・ロンドン公衆衛生大学院への留学決定直後、東京で東日本大震災を経験。相馬市の仮設健診などの活動を手伝いつつ世界保健機関(WHO)やパブリックヘルス・イングランドで研修を積んだ後、2013年から2017年まで相馬中央病院勤務。

お申し込み (事前申込制)

お名前、お住まいの市町村、年齢をお知らせください。

お申し込み先:環境再生プラザ(福島県・環境省共同運営)

TEL:024-529-5668

MAIL:josen-plaza@env.go.jp

詳細は、くるまざカフェ

検索

後援:ONEふくしま(福島民報社・福島民友新聞社・福島テレビ・福島中央テレビ・福島放送・テレビユー福島・ラジオ福島・ふくしまFM)



本日のディスカッションの様子をまとめた映像を、
後日「アップデートふくしま」ホームページで
ご覧いただけます。ぜひご覧ください。

また、本日のご意見、ご感想などはfacebookに
お寄せください。



アップデート
ふくしまHP



facebook